

江戸川大学生なら、キャンパスメンバーズで常設展が無料。

美術館にいきましょう。

江戸川大学は、独立行政法人国立美術館が運営するキャンパスメンバーズ加盟校だ。20世紀初頭から現在までの多彩な美術作品を展示する東京国立近代美術館を取材した。(取材・文: 増田朱音)



東京国立近代美術館

本館 東京都千代田区北の丸公園 3-1
工芸館 東京都千代田区北の丸公園 1-1
フィルムセンター 東京都中央区京橋 3-7-6

国立西洋美術館 東京都台東区上野公園 7-7

国立新美術館 東京都港区六本木 7-22-2

日本近代美術の保管庫



岸田劉生《道路と土手と塀(切通之写生)》
(1915年 油彩・キャンパス 重要文化財)

東京国立近代美術館ではその名の通り20世紀初頭から現代に至るまでの近代作品を中心に収集・保存・研究・展示を行っている。年間を通じて様々な企画展を実施しているが、じつは所蔵作品展はほとんど同じものを展示していると考えられている人もいます。しかし、東京国立近代美術館は1万3000点を超えるコ

レクションを所蔵している、展示には約200点が選ばれている。これらの多彩な作品を鑑賞してもらうため、美術館では頻りに展示物の入れ替えが行われているのだ。基本的には、企画展の入れ替えに合わせるが、屏風などの日本画はそれよりも早く入れ替えられている。理由は、上からニスを塗っている油絵とは違い保護するものがないため光に弱いからだ。そのため、屏風を照らすライトは油絵のものと比較すると、柔らかく少し暗い光になっている。



キャンパスメンバーズ

江戸川大学の学生・職員は、東京国立近代美術館(本館・工芸館・フィルムセンター)展示室を含む)と国立西洋美術館は、所蔵作品展(常設展)が無料で見られる。企画展は割引料金となる。国立新美術館はコレクションを持たず常設展示がないので、企画展が割引料金となる。利用する時は学生証・職

員証を交付にて提示するだけでいい。展示物は美術館によって大きく異なる。今回は取材していないが、国立西洋美術館では、美術の教科書で見られるようなルネサンスから20世紀初頭までの作品を中心に展示している。国立新美術館では、近代の新しい美術を中心に、国内最大級の展示スペースを生かした企画展を開催している。



左：巖光（あいみつ）《自画像》（1944年 油彩・キャンバス）は、大谷さんが大学1年生のときに初めて見て影響を受けた作品。右：川端龍子《草炎》（1930年 絹本彩色 六曲一双屏風）の部分。黒に近い紺地に金泥で夏の雑草だけを描いている。迫力のある作品だ。下：小林古径《唐蜀黍（とうもろこし）》（1939年 紙本彩色 二曲一双屏風）。ハイライトでは作風も時代も様々な作品が展示されるだろう。

じつは気軽な美術館

美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。

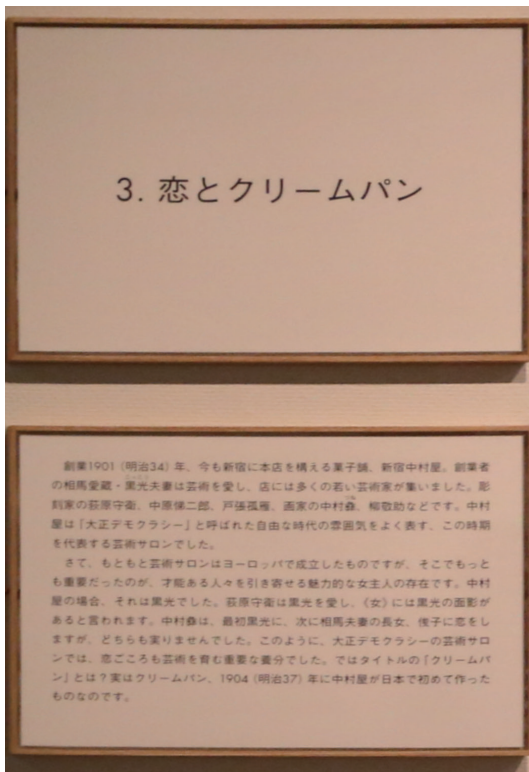
美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。

美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。

美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。

美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。

美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。



高村光太郎《手》（1918年 ブロンズ）と同じポーズを取ろうとしてみたが、なかなか難しく手がつりそうになる。実際にやってみることで、より身近に作品を感じられる。

美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。

美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。

美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。



美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。

美術館という少し堅苦しいイメージを持つ人も多いかも知れない。しかし、実際はそんなことはなくカジュアルな場所だ。